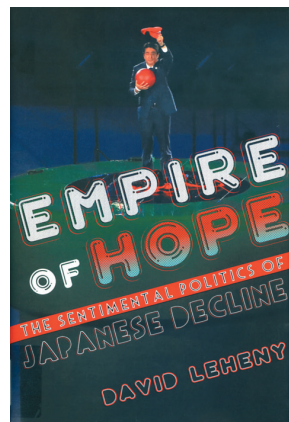


デイビッド・レーニー

## 『希望の帝国——ニッポン衰退の感傷的政治』

David Leheny, *Empire of Hope: The Sentimental Politics of Japanese Decline*

礪波 亜希



Cornell University Press, 2018

本書の著者デイビッド・レーニー氏は早稲田大学大学院アジア太平洋研究科に教授として勤務している。米ウエズリアン大学を卒業、コーネル大学で政治学の修士・博士号を得た後、東京大学社会科学研究所、ウイスコンシン大学政治学部、プリンストン大学東アジア学部での教授職を経て、二〇一八年から再び日本に滞在している。二〇〇〇年には米国務省テロ対策室で地域専門家として勤務しているそうだ。ユニークかつ華々しいキャリアは、著者の興味関心の幅の広さと造詣の深さを象徴しているようにも思われる。

国際政治学・国際関係論では、パワーすなわち「自己の意思を他人の行動に押しつける可能性」（マックス・ウェーバー）が国と国の関係に影響を及ぼすと考え、その相互関係が検討される。国

家は与えられた制約条件下で常に効用最大化行動をとる合理的主体であるとみなされることが多いが、この前提では説明や理解が困難な事象について、社会学、心理学、文化人類学、比較（地域）研究、歴史学などから様々な研究方法を取り入れた分析が行われている。なかでも近年急速に研究が発展しているのが、社会学、心理学、脳科学の知見を取り入れた国際関係における「感情」の検討である。その中であつて、本書は感情そのものではなく人々がいつどのように国家や集合的な感情を物語るのか、という感情表現のロジックに注目する。本書は、感傷的表現や情動に関する人文学の研究を取り入れた国際政治学・国際関係論の感情研究であるという。

本書の構成は

第一章 もしかして微笑み返してくれるかも

第二章 えひめ丸の魂

第三章 元氣出して、ベトナム

第四章 クール樂觀主義

第五章 光の帝国の上演

第六章 周辺部のUターン

第七章 全てが衰える

となっている。第一章では、映画『僕たちは世界を変えることが  
できる。』(We Can't Change the World. But, We Wanna Build a School in  
Cambodia, 2011)を皮切りに、日本の政治や国際関係における感情  
表現が吟味される。一九六〇年代の高度経済成長と保守主義に国  
民統一の物語を見出してきた日本人が、九〇年代のバブル崩壊以  
降、阪神・淡路大震災、オウム真理教による地下鉄サリン事件を  
通じて体制への信頼を失い、将来への不安にかられる過程が説明  
される。不安を打ち消すためのノスタルジ的な感情表現が例え  
ば映画『Always 三丁目の夕日』、NHK番組『プロジェクトX 挑  
戦者たち』に見られるという。

第二章は、感情そのものではなく感情表現が国家共同体という  
(架空の)概念を強化した例として、二〇〇一年二月一〇日に発生  
した宇和島水産高等学校の練習船「えひめ丸」の米国・ハワイ沖

での沈没事故が検討される。この事故では、米国の慣例では不要  
とされた沈没船の引き揚げが日本側の要求で実行されたが、その  
背景には日米双方が日本人を「遺体の引き揚げが死者を弔う上で  
重要とみなされるような国民感情を持つ集団」と定義し、様々な  
ストーリーが加えられたことがあった。

第三章では、下半身がつながった結合双生児として一九八一年  
ベトナムで産まれたグエン・ベト、グエン・ドクの双子の兄弟が  
一九八〇年代から九〇年代にかけて日本のメディアに頻繁に登場  
し、「ベトちゃんドクちゃん現象」を引き起こしたことを例に、感  
情表現がいかに・なぜ機能するのか、どのように始まり終わるの  
かが詳細に検討される。二人は一九八八年に日本赤十字社の支援  
を得て手術で分離されたが、著者はこの背後に、純真さを美德と  
しそれを脅かす邪悪な脅威が存在する「メロドラマ的な想像」が  
あるとする。ベトナムの犠牲者は米国による残酷な行為の被害者  
であり、よって特別に感情的な手当てを受けるべき「子どもた  
ち」である……このような想像こそが、ベトナムに対し日本が果  
たし得る修復的な役割を想像する機会をもたらしただけという。

第四章は、政治学・国際関係論の観点からいうと本書の真骨頂  
を発揮した章である。ジョセフ・ナイの「ソフトパワー」概念が  
一九九〇年代に登場し、二〇〇〇年代以降日本でも受け入れられ、  
日本の文脈に合うよう変化した過程が述べられる。文学者ローレ

ン・ペーラントによる、先進工業国あるいは米国においてはある種中毒的な上昇志向が人生の主題になっているという「残酷な樂觀主義」概念を参照し、ソフトパワー概念がもつ感情的な側面こそが国家の物語とパワーを結びつける糸口であると主張する。そして日本の「クールジャパン戦略」政策が、国のクールさの総量を国民総生産になぞらえて「国民総クール」としたダグラス・マレーによる二〇〇二年の記事をきっかけに始まった経緯などを述べ、ソフトパワー概念が再定義される。すなわちソフトパワーとは、権力の源ではなく、国家が実際に保持していなくても、あるいはそもそも全く存在していなくても、その国の政策に影響をもたらし得る思想（文化的および表意的統治構造の一要素）ではないかと問う。

第五章では一転、演劇集団キャラメルボックスによる作品『光の帝国』の事例分析が行われる。恩田陸の小説を舞台化したもので、不思議な能力を持った一族が、東北地方の山奥で暮らしていたにもかかわらず次第に様々な問題に巻き込まれていくというのがあらすじであるが、キャラメルボックス版は原作を細かい点に至るまで踏襲しながらも、あえて感情的効果を発動させるために本筋から逸脱している。主人公たちは彼らが以前行った選択のために孤立しているが、元のコミュニティが主人公の選択を理解することで、仲間に戻ることが許される。この感動のクライ

マックスシーンを、著者は「魂の救済は社会にあり」と描写する。すなわち人と人との繋がりにこそ希望が存在するという約束のメッセージこそが「キャラメルボックス体験」であるという。

第六章は、東京大学社会科学研究所の希望学研究、特に釜石プロジェクトを中心に、日本の戦後経済成長に織り込まれたある種の「約束」を再建するための試みが検討される。希望学の背景として、日本の「衰退」が社会的に認識されていた過程が描かれる。地方から都市に移住した人が故郷に戻るUターン現象の象徴的意義、NHK連続テレビ小説『あまちゃん』に描かれた東日本大震災前後の東北地方と東京、著者自身の震災の経験を踏まえ、「金石の奇跡」とよばれる岩手県釜石市の三千人近い小中学生のほぼ全員が避難し奇跡的に無事だった件のナラティブが分析される。そして、震災からは様々な感情（悲嘆、恐怖、ノスタルジア、心配、プライド、安心、歓喜など）が想起されるにもかかわらず、国と指導者層にとって最も都合のよかった感情は「希望」であったと指摘する。彼らは、国民に危機やそれから生じる対立を乗り越えさせなければならぬ。そんなとき「国民は皆コミュニティの一員であり、対立を克服し奮闘さえすれば最良の日々がやってくる」というストーリーによって裏打ちされた「希望」という感情は、実に有用であつたはずと著者は述べる。

第七章は本書のまとめに加え、現在の日本では、自国の紛れも

ない衰退ですら「課題先進国」などといって優越性や希望に置き換えられているさまが述べられる。どの国であつても衰退の運命からは逃れられないが、そこに最初に到達したのは日本である、ゆえに日本は世界にとって価値があり続けるというロジックである。最後の一節が秀逸で、ここで読者は本書のタイトルの意味するところを理解する。

ほとんど失望のような形で、そこには希望——日本が何なのか、集合的に努力し続けて何になるのかという気分からそつと力を引き出す希望——がある。そしてこの希望には効果がある。なぜならその物語は、日本が他のどの国よりも多少は先んじているという結末になるからだ。

著者の主張は「(パワーや国家共同体などが)存在する」という想像が政策に影響するといふもので、人文学の影響を受けたと著者自身も認めるとおり、分析も解釈主義的なものを中心である。米国のトランプ大統領の就任、英国のEU離脱(Brexit)など、社会の文化的分断が政治に多大な影響をもたらした現象が世界の各地で起きている昨今、本書のような研究が日本に関してもなされたことの意義は大きい。しかしながら、政策分析の観点からいうと、想像と政策に因果関係があると主張するならば、どうしても実証

の必要性から免れることはできないのではないだろうか。同様に著者の解釈に必ずしも同意できないものや、単純な類型化が気になる部分もあり、著者自身のバイアスをより明確に自覚する必要と、これを各章の途中ではなく第一章などで前提条件として記述すべき必要があるように思われた。

第五章では、なぜこの劇団と演目が分析対象として選ばれたのかが不明であつた。私は演劇には全く明るくないので批評は控えるが、キャラメルボックスというすでに解散してしまった劇団の、規模的にそれほど影響の大きくなかった演目を考察することの政治学的な意義が問われるように感じられた。個人的な希望として、例えば、映画『男はつらいよ』シリーズや、もしくは『遠山の金さん』『大岡越前』『忠臣蔵』、最近では『ドクターX』『外科医・大門未知子』など、年齢、性別、教育レベル、所得など個人の属性を問わず日本に長く暮らした人なら誰もが目にしたことのあるような「国民的物語」における感情表現とその政治的影響について、ぜひ今後著者の意見が聞けることを期待したい。